

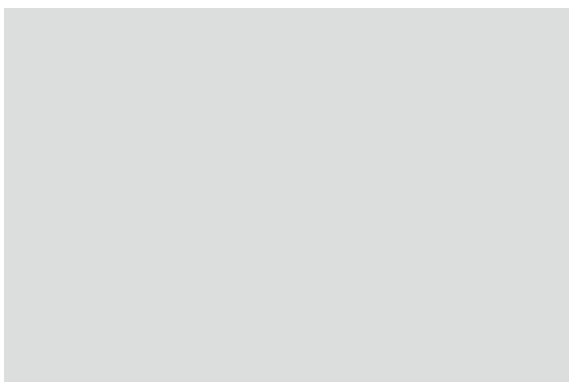
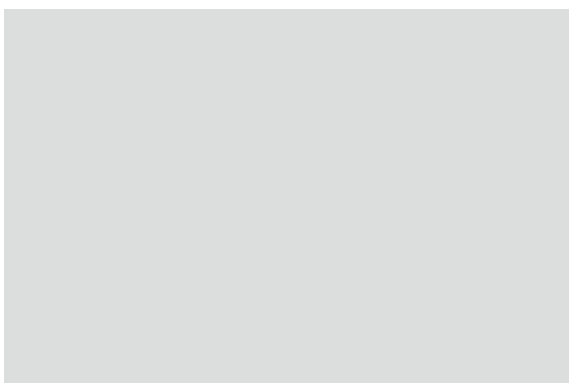
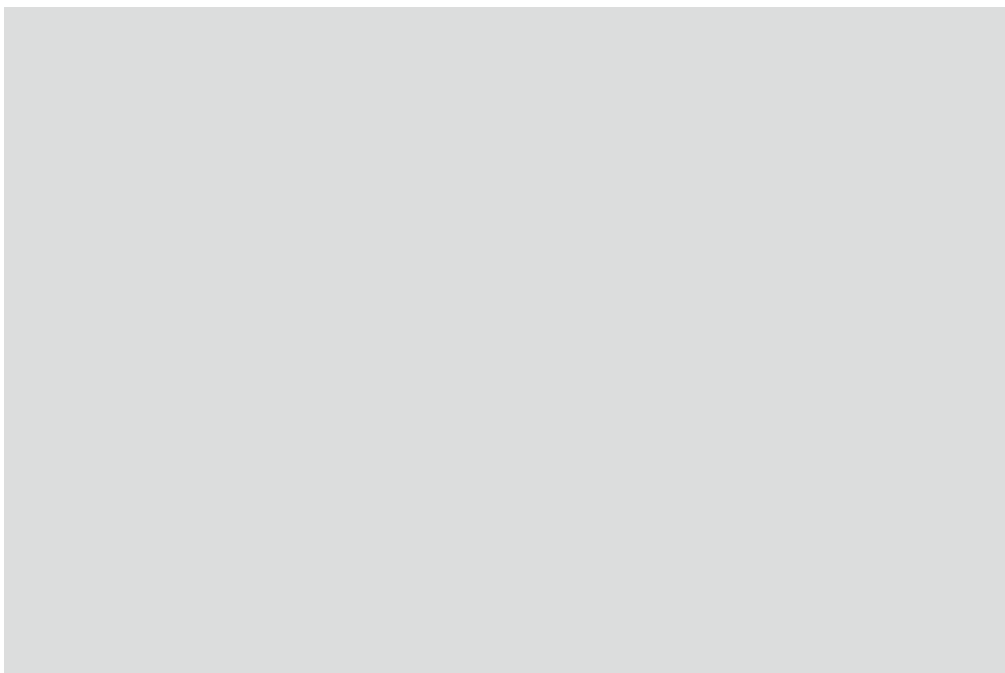
# 終える命、

## つなぐいのち

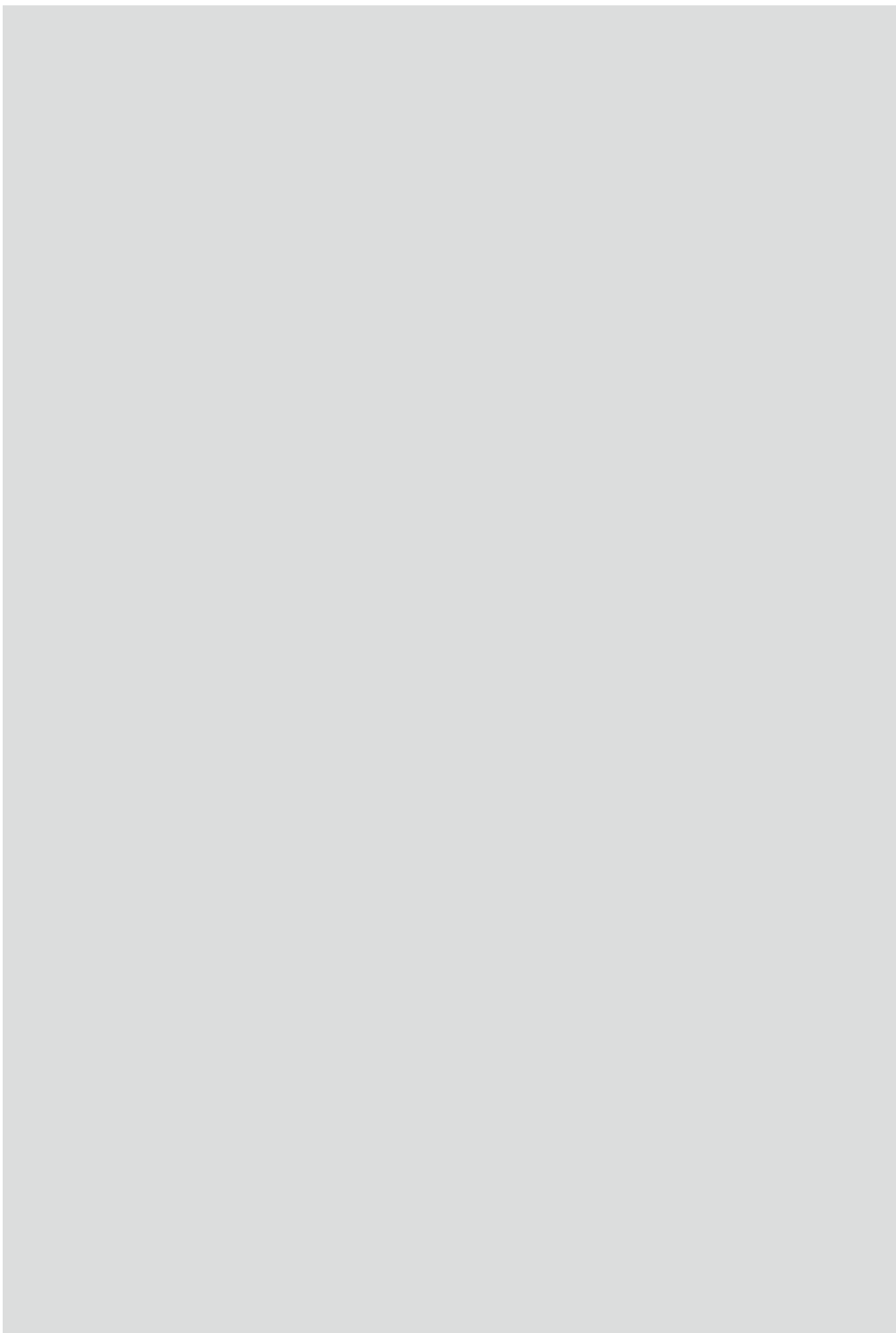
國  
森  
康  
弘

第5回 さいごの家族旅行

※本連載は、本文のみ無料でお読みいただけます。  
写真は、冊子版でのみご覧いただけます。



今この瞬間を、  
生き抜く。



脈が20台に落ち込んだんだけど、ミニーちゃんが会いに来てくれて、60近くに戻った。

# 1

か月半後、家族みんなでデイズニードに行く……。華蓮ちゃんは、大きな目標を立てた。「そのときは、家族写真を

いっぱい撮ろう」と筆者は華蓮ちゃんと約束をした。

宮城県沿岸部の町に暮らしていた華蓮ちゃんは、小学4年生。2011年3月11日発生の東日本大震災の際には、何とか怪我もなく、高台にある自宅までは津波も届かなかった。でも、それ以来、気分が悪くて、吐くことが多くなる。いろんなお医者さんに見てもらったが、どうもはつきりしない……。似たような症状の子どもが多く見受けられたからか、「震災ストレスでしょう」と言われ、ときおり、胃薬をもらったり、点滴を打たれたり。

6月になって、見かねた祖母が「大きな病院で、全身検査してもらおう」と連れて行った大学病院。そこで、脳腫瘍が見つかった。前日まで一輪車に乗っていた華蓮ちゃんは翌朝、手術室へ。そのまま入院と闘病の生活が始まった。抗がん剤治療、放射線治療……。しかし、その年の暮れには、「残念ですが、今の医療技術では……」と言われた。

華蓮ちゃんは翌年、大好きな家族のいる自宅に戻る。友達も遊びに来てくれた。そして、「もう一度、デ

ズニールランドに行きたい」と言った。震災が起きるまでは、毎年1回、デイズニールランドに家族旅行するの  
が、華蓮ちゃんのいちばんの楽しみだったから。

ただ、病状は容赦なく進行していった。「2〜3週  
間で亡くなってもおかしくない。正直、旅行日まで、  
もたないでしょう」と吐露した医師はその一方で、「目  
標をもつことは、生きる力につながる」とも。筆者は  
デイズニールランド行きの知らせを、待った。

連絡が来た。医師が見送りにきて、お守りを華蓮ちゃんに手渡す。訪問看護師はボランティアで同行した。  
「死が近づくほど、できないことばかりが増えると考え  
がちだけど、できることはさいごまでたくさんある。  
私は本人ができること、したいことに目を向け、華蓮  
ちゃんたち家族の思い出づくりを手伝いたい」。

華蓮ちゃんは2日間のデイズニールランド旅行を果た  
す。途中、脈が落ちて救護室に運ばれた。そこへ、い  
ちばん好きだったミニーマウスが、サプライズで会  
いにきてくれた。脈が、戻る。

ミニーマウスたちに元気をもらった華蓮ちゃんは、  
帰宅した翌々日、自宅から天国へ飛び立った。優しい、  
寝顔だった。

〈2011〜2年に宮城県仙台市・千葉県浦安市にて  
初出…華蓮ちゃんさいごの家族旅行——「いのちのバトン」をみなの手に  
(農文協 2014)〉

くにもりやすひろ●写真家。イラク戦争を機に新聞社から独立し、紛争地や貧困地域などの現実を伝えてきた。  
2008年から日本の「在宅看取り」の現場を撮り始める。写真絵本『いのちつぐ「みとりびと」』シリーズ(農文協)ほか。